

佳作

生きていてくれてありがとう

京都府
ノートルダム学院小学校三年

清水 堯仁

「起きや。お兄ちゃん。しつかりしてや。」

お母さんの車の中で眠ってしまっていたぼくは、知らないおじさんにたたきおこされた。

「ピーポー。ピーポー」

救急車のサイレンが聞こえた。熱を出していた弟がスパーの中でおれてしまったらしい。弟は、お母さんにだかれていたが、白目をむいてガクンガクンとけいれんしていた。お母さんとぼくは救急車に乗せられた。初めて乗った救急車だけどうれしくなかった。

病院の救急室に運ばれて、ぼくたちは外でまたされた。十分たつても弟の声は聞こえない。もう一人先生が走って入っていった。

「まーくん。だいじょうぶだよね。」

とぼくがお母さんに聞いたら、お母さんは何も答えずにぼくをだきしめた。

弟が生まれた時、ぼくはとてもうれしかった。おむつもかえだし、ミルクもあげた。ふわふわのほっぺにいっぱいチューをした。いつもいっしょに遊んだし、けんかもしたけどすぐ仲直りした。もうぼくのことを

「たかちゃん。」

とよぶ声が聞けなくなったらどうしようとてもつらくなった。

とても長い時間がたった。

「えーん」

弟の声が聞こえた。ぼくは「生きていてくれてありがとう。」

と思った。お医者さんと弟に何度もありがとうといいたかった。

次の日に弟は退院できた。おむかえに行くと弟はコアラのマーチを一人で食べていた。

「あー。」

ぼくは声を出したが、ゆるしてあげた。とてもがんばったんだから今日はゆるしてあげようと思った。

あれから熱を出しても一度もけいれんをおこすことはない。いつもしゃべるか、歌っていてとてもうるさい弟だけど、生きていだけでありがたいと思ったあの日のことを忘れない。とてもかわいい弟だ。来年は、一年生になるからいっしょに小学校に行こうね。